



京都創生

■ エッセイ

京風 今昔	市田 ひろみ
町組と小学校の今日	辻 ミチ子
おぼんざいと三女性	松本 章男
町歩きは、楽しいですか	杉田 博明

京都創生推進フォーラム

光り輝く歴史都市・京都創生宣言

日本の歴史や文化が集積された千二百年の都・京都は、日本の財産であり、世界の宝です。私たちは京都人であることに誇りを持って、私たち自らが、この京都に、景観、文化、観光の三つの大輪の花を咲かせ、光り輝く歴史都市・京都を創生することを宣言します。

景観

私たちは、京都ならではの自然や町並み、建物を保全・再生し、美観を損ねる看板や放置自転車などをなくすことで、美しい景観を持つまちの創生に努めます。

文化

私たちは、京都で生まれ、育まれてきた多様な伝統文化を守り、継承し、自らも文化芸術に触れ、実践することで、日本文化が息づくまちの創生に努めます。

観光

私たちは、京都の歴史的な価値や新たな魅力を創造・発信し、京都を訪れる人を暖かく迎えることで、世界の人々が自由に集い交流するまちの創生に努めます。

1

平成 17年 11月 9日
京都創生推進フォーラム

京都創生推進フォーラムの活動

京都創生シンポジウム

京都創生 ～美的生活のなかに～

華道末生流笹岡次期家元 笹岡隆甫 氏

「文化とは、人と人が出会うとき、ぶつかるときに生まれます。三方を山に囲まれて、その中で人がひしめき合って暮らしている京都は、新たな出会い、新たな文化が創出される、そういう機会に恵まれた素晴らしい町です。」

平成 20年 7月 23日



京都創生連続セミナー

家紋・カモン ～家庭に継承される伝統文化～

京都紋章工芸協同組合 理事長 中村光雄 氏

「家紋は、御先祖が一家のことを想って決められ、そして、代々その紋が今日まで受け継がれています。御先祖の願いや想いが込められた家紋の文化は、皆さん自身が伝承の担い手です。正しく、大切に次代へつないでいってください。」

平成 20年 9月 28日



『京都創生推進フォーラム』

我々京都人は、我々の愛するまち・京都を、今日に至るまで守り育ててまいりました。千二百年を超える悠久の歴史と文化が息づき、山紫水明の自然と美しい都市景観を誇る歴史都市・京都は、日本国民の財産であり、世界の宝です。

この京都を我が国の歴史文化の象徴として保全・再生・創造し、活用・発信する「京都創生」に賛同する団体、企業、市民が集い、その実現に向けて、自らが積極的に取り組み、相互に協力し、活動の輪を広げることで、京都から、広く国内外に京都創生の気運を高めていくことを目指しています。

本フォーラムは平成17年6月に設立し、現在、およそ550の企業・団体・個人が参画し、活動しています。

運営委員会委員（10団体）

京都商工会議所、京都経済同友会、京都市観光協会、京都市景観・まちづくりセンター、京都市芸術文化協会、大学コンソーシアム京都、京都新聞社、京都府、京都市、京都文化交流コンベンションビューロー

2

知行合一 ～大佛師の心情～

大佛師 松本明慶氏

「私の工房では、秘伝はありません。自分の知識や技術を弟子にすべて伝授します。技術を隠して自分だけのものとして守りに入るといった閉鎖した環境に進歩はありません。よい発見をすべてオープンにして、弟子たちが健全な競争をすることで活性化が生まれます。」

平成20年11月23日



盆栽 ～魅惑の小宇宙～

(社)全日本小品盆栽協会 専務理事 浦部達夫氏

「豊かさとは、経済的なものだけではないと思います。生活のちょっとしたスペースに盆栽や草花を飾る、これが日本の伝統的な知恵であり、もう一つの豊かさでもありました。盆栽をきっかけに日本の豊かさについて見直してほしいと思います。」

平成21年2月28日



京風 こん じゃく 今昔 市田 ひろみ

私は、講演や呉服の展示会で、旅をすることが多い。どこへ行っても、話題は京都のことになる。

「京都は良いですねー」

「修学旅行で行きました」

「京都の言葉は優しいですねー」

など、京都のお陰で、私は大きな恩恵を受けている。

古都・京都は宿命のごとく「伝統と創生」をくりかえしながら、時を刻んでいる。

戦後の町家暮らしも、遠い霧の彼方だがそれなりに、私の原点であることも確かだ。

四条新町の我が家は、文字通り、うなぎの寝床で、表の間につづいて、茶の間、その奥に十畳程の座敷。

この座敷に面して小さな庭があった。

手水ちようず（便所の手洗い）の横に、沈丁花じんちようげが春先、白い花をつけていた。

玄関から奥にかけて、はしり（通り庭）があって、おくどさん（かまど）がふたつ。天窓からはあかりが入っていた。

表は紅殻格子、二階の表は、虫籠窓むしこ。みんなで晩ごはんを食べている時、何度か、ザーツという音にひやりとした。

「巳みさんや!!」

蛇が天井裏を這っているのだ。蛇はその家を守るどされ、もし見つけても、いじめたらあかんといつも、母から言われていた。

戦争で焼けなかった京都は、ほとんど瓦ぶきで、四条烏丸の南西角にあった大建ビルだけが大きなビルで、西隣の空き地では、木下サーカスがテントを張っていた。

昭和 21 年、祇園祭の長刀鉾と月鉾が復活。

日本の敗戦からの復活と、一基一基、山や鉾が復活してゆくさまは、連動して、京都の人々に勇気と希望を与えていた。

暮らしむきが便利になってゆく一方で、町のたたずまいは少しずつ変わっていった。

町内の家は次々と格子戸を外し、一軒又一軒と洋風になっていった。

現代ほど、京町家の価値観も認められていない時代だし、いつまでも格子戸の家は、何だか古くさくて、子供心にいやだった。

遂に、我が家も、昭和 40 年頃、建てかえて格子戸もおくどさんも無くなった。

四条通りも、呉服問屋が軒を連ねていた室町通りや新町通りも高いビルが林立して、子供の頃、缶けりをした路も、地藏盆であそんでもらった家もまぼろしの風景だ。

実は、私的なことだが、平成 19 年、間之町竹屋町下ルに文化教室を建てた。百坪程の土地だが、最初から、京町家のイメージにしたいと思っていた。

瓦屋根、土壁、格子戸、室内の戸は赤い塗と唐長の唐紙、藍染めののれん…。

かつて失った四条新町の我が家は、私の夢を満たして、よみがえった。

どうして、私の中で、こんなに町家にこだわっていたのだろうか。

単なるノスタルジーだろうか。

いや、40 年を越える日々、和の文化と向き合ってきて、内なるものが形となっていったのだろう。

今、京都の町中で、京町家は、あきらかに再生している。

手入れのゆきとどいた町家の中が、レストランであったり、ブティックであったり。

不思議なことに、町家の風情は、世界の文化をとりこんで、新しい空間を作ってしまった。

一方で、千年を越える祭やしきたりを守り伝えながら、一方で変容しようとする。

京都は、単なる古都ではなく、再生するエネルギーをたくわえているのだ。

ところで、私は、京都弁のお陰で、映画やドラマに出演している。

女優を志しているわけではないが、タレントで京都弁を活かせる人が少ないので、およびがかかるのだ。

もうひとつ、変わらないものに「京風のもの言い」がある。

何事も旗幟鮮明にしない。時として、腹の中が読

めないと言われるが、これも都であった京都のかしい生き方の手法だ。

決して争わない。敵を作らない。

まして、商家では、来る人はすべて客。とりわけ権力者に対しては、つかず、はなれずの距離感を持って接してきたのだろう。

たとえ、いやな人でも、あるいは親の代に何があったとしても、知らぬ顔してさりげなくつきあってゆくことで、京の人は我が身、我が商売を守ってきたのだ。

町の風情や風格は、そこに住む人が作ってゆくものだ。

紙くずや煙草の吸い殻が散らばってはいならない。

文明と文化が共存し、快適に暮らせる町として、生き残ることを祈る。

いちだ ひろみ（服装評論家）



町組と小学校の今日 辻 ミチ子

小学校跡地活用ランキング

かつて京都の小学校は番組小学校とか、町組小学校と呼ばれ、京都住民が積極的にかかわって誕生した小学校であった。鳥羽・伏見の戦いがあった翌年の明治2年(1869年)に、市中に町組を基盤にした64校の小学校が成立している。それから120年、平成の時代にもなると都心部の人口の減少や少子化によって児童数が減少し、小学校の統廃合が行政の大きな課題になった。「おらが小学校」と住民が支えてきた小学校だけに、当初は統廃合に反対の意見が根強かったが、そこは京都の住民だけあって、行政側としっかり意見を交換し、そのスケジュールに合意して、百年後を見すえた、先祖に恥じない地域の公共施設を実現させようとした。

5 まず、開智校は「京都市学校歴史博物館」。各学校に寄付されていた学校文化財(美術工芸品)、教育の歴史を知る資料など貴重な物品を集めて活用している。次いで竹間

校の「京都市子育て支援総合センターこどもみらい館」。明治18年(1885年)京都でいち早く幼児保育を始めた竹間校ならではの施設である。次は明倫校の「京都芸術センター」。心学講舎を校舎として開校した明倫校は、昭和6年(1931年)に改築した和洋折衷のモダンな校舎をもち、京都の芸術を振興するセンターとして運営されることになった。

この跡地活用の紹介は、開設年次順によるもので、その後、修徳校、小川校等々と続くが、跡地には「特別養護老人ホーム」「デイサービスセンター」「児童館」「公園」など、早急に必要な施設が作られた。それらには行政と地域の人々の叡智が凝縮していて、跡地活用にはランキングはつけられない。御先祖様は、“よくやっているよ”と認めているのではなかろうか。

志士と町組のコラボレーション

さて、「学制」に先駆けて開校した町組小学校の生立ちは、慶応4年(1868年)、江戸が東京となり、年号が明治と改元、天皇が東京へ移ろうとしていた頃、長州出身の画家森寛齋の家で、国事に志をもつ町の人々が集まって小学校の設立を話し合っていた。長州の広沢真臣の指導があり、バックには「一般人民の教育」を念頭にする木戸孝允がいて、この森グループの一員西谷良圃は、小学校建設の急務を訴え、「口上書」を京都府に提出した。

一方、「殖産興業」と「教育」の二本柱に京都の再起をはかった京都府では、木戸が目をかけていた榎村正直を迎え、「政教一致」の小学校建設に取り組んだ。府は町の自治、町組(町連合体)の自治の伝統をたよりに住民の力を活用し、町組の均等化の上で、町組ごとに行政と教育を行う小学校64校の開校に成功した。この学校運営には無理は

あったが、京都に未来を見出したい町の人々は、智恵と財力を出し合うのである。小学校は志士と町組のコラボレーションだといえよう。

学校の建設費は、府からの下賜金もあったが、町内は一世帯ごとに負担金を出し、さらに、町組を母体にして異色の金融会社「小学校会社」を設立し、学校の継続維持をはかった。学校の一室では町組の年寄たちが行政事務につき、火事を防ぐ防火楼、天然痘予防の種痘所、郵便の切手販売所まで置かれ、「報刻鼓」は西洋時刻で鐘を打った。

教育の内容は幾多の苦勞をとめないながら、基礎学力の充実、世界情勢の理解、算術などに力を入れ、京都府独自のカリキュラムを作成した。しかし、その後は文部省の指針による教育が進められていく。

町組・学区からコミュニティへ

以来昭和に至るまで、京都の小学校は成立母体を町組から学区へと名称だけの変更したが、内実は変わらなかった。全国的に市町村の行政組織が整理されるなかで、異例な事であった。行政事務が行政機関に移っていくと、学校は教育の施設として進展し、京都では学区が町自治の要の地位を譲らなかった。唯一度、新制中学校の設立期には、止むなく通学区の変更が見られたが、それでも、元学区として学区の自治活動は続けられてきた。

それなのに、昨今、統廃合の大変動に直面し、住民は町自治の能力を試されることになった。町内には先祖代々からの住民は少なく、仕来りに馴染ま^しない新住民との折合いのむずかしいなか、跡地活用の問題に取り組むことになったのである。そこでは、学区を越えたコミュニティ、地域の

絆をしっかりとった上で、現代に相応しい活用を目標にして計画を練らなければならなかった。

そして、菊浜校の「ひと・まち交流館 京都」は市民の自発的活動の支援を目ざし、梅屋校は、「京都第二赤十字病院・救命救急センター」と、子どもの成長をサポートする「京都市子ども保険医療相談・事故防止センター京あんしんこども館」を、龍池校には注目の「京都国際マンガミュージアム」が市民の生涯学習推進の施設としてオープンした。これらは社会の脚光を浴び、いずれも跡地活用は市民から注目されている。はからずも跡地問題は「おらが京都」を考えるきっかけになったようだ。

生活のなかで本気で考える住民の自治意識は、京都を活気ある都市に進化させる機軸になるに違いない。

つじ みちこ（元 京都文化短期大学教授）



京都市学校歴史博物館（旧開智小学校）

おぼんざいと三女性 松本 章男

生粋の京おんな、秋山十三子・大村しげ・平山千鶴のお三人の筆になる『おぼんざい』は、1966年に出版された。

この本によって「おぼんざい」という表現がひろく知られるところとなったが、かんじんの著作そのものは次第に忘れられていった。私はそこで2002年、この好著が『京のおぼんざい』^{*}という改題で復刻再刊されるお手伝いをした。京都の伝統的な家庭料理・食文化のしきたりなどを新たな世代の人びとに受け継いでもらうために、埋没させてはならない著作である。そんな思いにとらわれたからであった。

7 京都の食生活では、「おまわり」「おぞよ」ということばもよくつかわれる。

たとえば、梅雨入りのころから鱧^{はも}など筒形の魚に旬^{しゅん}の味がのる。同時に香りのよい新牛蒡^{ごぼう}が出回りはじめる。私の母は「今晚のおまわり何にしよ」といったあんばいに、おまわりということばを口にした。私が「はもごぼう」を炊いてほしいと言うと、「そうやね、旬の出合いものやしね」と母は答えたものであった。



おぼんざい

味煮したゴボウを、骨切りしたハモの身で巻き包み、芯のゴボウがばらけないよう干瓢^{かんぴょう}で縛る。それをさらに薄づゆで煮^{くず}て葛を溶きこむ。「はもごぼう」である。

季節の移りゆきにつれて旬の食材が次々と出回ってくる。京都の女性はそれを逃さず取りあげて、調理に工夫をこらし、日々の食卓を豊かにしてきた。「おまわり」とは昔、御菜を大皿に盛って会食者に取り回してもらったところに生じた^{もんごん}文言らしいが、京都の家庭料理にいう「おまわり」は、むしろ食材の移りゆき・出回り具合を表わしているとみてもよいかもしれない。

「おぞよ」のほうは、漢字をあてると「御雑余^{おぞよ}」になる。「あしたからてんでこ舞やから、おまわりをつくれへん。何か日の保つ^もおぞよを炊いとかんならん」。母はそんなふうで、このことばをつかった。

おから・ひじき・千切り・お豆さんの炊いたん。つまり、調理にさほど手間のかからない、安あがり、ときに当座しのぎになるおかずが「おぞよ」である。

そこで、お察しくださるように、おまわり・おぞよ双方を包括する表現が「おぼんざい」なのである。

本の著者の三女性は、「晴」つまり祭事などの日には財布の紐を思い切ってゆるめ、腕に擦り^よをかけて「おまわり」にご馳走を調理していただける。けれども、「褻^ケ」つまり日常普段は手間隙かけても金銭はかけない。始末する知恵をみがき、これまたうんちくを傾けて、「おぞよ」の数々を用意していただける。そして、食生活の十二月、季節感にあふれる京都の伝統的な

^{*}『京のおぼんざい』平成14年復刻版 光村推古書院発行

「おまわり・おぞよ」の十二ヵ月を、『京のおばんざい』は伝えてくれている。

私は^{みぶな}壬生菜が好物である。わが家の庭を菜園にして、三十年来、私はこの伝統野菜を栽培してきた。

壬生菜といえば、まずはハリハリ鍋。昨今は合わせ具^{ぐくじらい}の鯨の煎り皮が見あたらず、ベーコンと油揚げを刻んで代用するのだが、それで結構おいしい。ごまあえも^{すばち}搦り鉢など不必要。市販のすりごまでよい。サラダボウルさえあれば手軽につくれるようになった。

壬生菜は浅漬けもおいしい。押しぶたがスプリングのねじ込み式である、プラスチックの漬けもの器が市販されている。これで香りを逃さない漬け込みが可能になり、わが家では真冬から春先へかけて、壬生菜の浅漬けを食卓から欠かすことがない。

それやこれや、食生活も時代の変遷につれて必然的な対応を強いられてきているのだが、『京のおばんざい』は、先見の明をもって、その対応の仕方までも示唆してくれている。

1980年だった。味のエスプリ『饗宴』という雑誌に、秋山・大村・平山さんと私の4人で座談会をしたことがあった。その席上、「おばんざい」について、司会役の若きインテリ女性が、「お豆さんの炊いたん、も結構ですけど、固い大豆をやわらかく煮るなど時間のかかる調理は、わたしなど多忙な人間にはできません」と言った。「あなた、何おっしゃるの。寝る前にお鍋に湯を張って大豆を浸けます。時間なんて取らない簡単なことですやろ。翌日、お勤めから帰られたころ、お豆はやわらかくなってます。それを炊けばいいだけのこと。手間もかかりません」。すかさず切り返したのが秋山さんだった。

時は移った。京都に生活して、京都の食についても「通」を自称する人がたくさんいらっしゃる。もしそれらのなかに三女性の著作をご存じない人があるとすれば、その人は「もぐり」であろうと言ってもよい。

私自身がときおり『京のおばんざい』をひらいて、「なるほど、そういうことか」と、先人の知恵の蓄積が伝えられているところに、なお発見をくりかえしている。

まつもと あきお（随筆家）



錦市場

町歩きは、楽しいですか 杉田 博明

それが町歩きであるのかどうかはわからない。子どものころ西陣京極の国際映画劇場なんかで一人映画を観たあと、まっすぐに帰らずに、「探検」と自ら称して、よく横道にそれた。ちょっぴり背に心細さを感じながら「おれは迷ってるんだぞ。まちがいない」といい聞かせ、背伸びして歩いた。「探検」の日々は、一見、同じような表情を持ちながらどこか違った町の肌合いが、先へ先へと足を進ませ、ほんとうに道に迷ってしまったこともある。

いきあたりばったりの、当てのないそんな町歩きであっても、予測できないなにかの出会いの結果があった。格子戸とアラベスク風のタイルやステンドグラスが不思議な取り合わせをみせる町家なんかと並んだ町に出会った日の夜は、なぜか遅くまで寝つかれなかった。

長じて独自の画境を拓いて知られた富岡鉄斎に惹かれ、その書による看板を捜して歩いた。寺町通三条上ルの洋菓子の老舗「桂月堂」から姉小路通麩屋町西の日本画材店の「彩雲堂」、今出川通堀川西の鶴屋吉信の「柚餅」へ。はては熊野神社交差点東北角の「聖護院八ツ橋 玄鶴堂」などを巡った。聖護院周辺には玄鶴堂のほかに二軒の八ツ橋の老舗がそれぞれの軒に聖護院門跡書の「洛東名物八ツ橋老舗」、無款の「八ツ橋」を掲げていて、鉄斎の書風と並べあかずに楽しんだ。

看板を手がかりにした町歩きは、しばらく続いた。書家で、陶芸家で、美食家の北大路魯山人の看板を探して町を歩いたこともある。魯山人は、京都市内に何枚かの看板を自ら彫って残している。

白崎秀雄著の『北大路魯山人』によれば、柚味噌(姉

小路通東洞院角、八百三)、御水引老舗(中立売通堀川東、源田紙業)、平安畫房(四条通繩手)、たね半(寺町通四条)、団扇堂(富小路通六角)、土井撰美堂(蛸薬師通烏丸)、五色豆(寺町通二条)の七枚。いま、見ることができるのは、「柚味噌」と「御水引老舗」だ。

これらの看板は魯山人が、大阪の町書家の岡本可亭(岡本太郎の祖父)の内弟子となって福田鷗亭を名乗り、大正2年に号を大観と改めたあとに彫ったものである。「大観」と刻した落款は、なにかと誤解を招いた。『北大路魯山人』にも、天下の日本画家横山大観と間違えた人のエピソードを紹介している。

「柚味噌」の八百三の東隣にある和菓子老舗の看板「御菓子司亀末廣」は、近代書道の先覚といわれた山本竟山の書。竟山は、京都大学内に道場を開き、「関西の書風為に一変す」と評された。ノーベル賞を受賞した湯川秀樹さんは少年時代にその門で学んだという。看板は周りを干菓子の木型が取巻く。知恩院に納めた干菓子の、一回こっきりの木型などで、花鳥や魚のデザインがある。

木型のなかに鮎を見つけ、その鮎の姿がよほど気に入ったのか。鮎釣りを愛した日本画家で文化勲章を受けた福田平八郎さんは、新聞のエッセーに書いた。

「…木目を見ていると、流れに見えて、しかも清流を思わせる。この鮎は清流を登る登り鮎であって、その流れのところどころに岩をかむ激流があり、渦巻きがある」

町歩きで出会う看板の格調はさることながら、一枚の看板をめぐる、店の主人や通りすがりの人などから書家との秘められたかかわりについて立ち話が弾んだ。通りすがりの気まぐれびとへ、そんなときの



人々の問わず語りの話が落ち着くさきは、いつも町がもっとも輝いていたころの旧懐であった気がする。

京都の町なかに老舗などの木製の古い看板が多く残っている要因として、先の戦争で大きな爆撃をうけなかったことが指摘されたりする。そればかりではあるまい。焼夷弾が投下されたとき、火災から脱出を容易にするために、軒の看板を降ろすようにと指令があったそうだ。降ろされた大きく重たい看板は燃料になったり、行方不明になった。いまに残る看板は、そうしたなかで人々が頑固なこだわりをもって伝えてきた証しといってもよい。

それはなにも看板にかぎらない。町家も例外では

ない。見事に葺かれた軒先の一文字瓦や、軽快でやさしい風景をつくるむくり屋根、控えめな駒寄せ、格子ひとつにしても多様な姿で、それぞれにアイデンティティを秘めている。多目的に再生、利用される新たな町家に、語り継いでいけるこだわりの証しの根っこが人々にはたしてどれほどあるだろうか。時の流れとともに移り変わりつつある京都。それがどう変わっていくのか。いきあたりばったりの町歩きを繰り返すなかで、期待と不安に目を凝らし、しっかりと見つめていきたい。

すぎた ひろあき（ジャーナリスト）



「京都創生座」事業について

京都芸術センター

京都創生座第3回公演「四神記～神降る都の物語」(平成21年3月21日・弥栄会館にて開催)パンフレットに、立命館大学教授・「上方芸能」編集代表の森西真弓さんから「伝統芸能の技と心を受け継ぐホープたちが、能・狂言・歌舞伎・舞踊・音楽などのジャンルを超えてコラボレーションします。伝統芸能もまた、人から人へ伝えられ、私たちの感じる心、考える力が育んできました。今、未来に豊かな実りをもたらせるための新作が、創生座から生まれます。驚きと納得の舞台を、ぜひその目で確かめてみてください。」というお言葉をいただきました。

11 京都創生座は、歴史都市・京都創生策に掲げている伝統文化の継承と発信の拠点となる「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)」の整備に向けたモデル事業で、センターのイメージを明らかにするとともに、センター実現の気運を高めるため、京都市が平成19年度から実施しています。

京都に息づく優れた伝統芸能を継承するとともに、能・狂言・邦舞・邦楽等の分野や流派を超えて伝統芸能の新たな創造や発信を図ることに加えて、国内外の人々が多く訪れる京都の強みを生かし、多くの人々に伝統文化の魅力を体感していただき、また、伝統芸能に携わる関係者の交流等を図ることを目指しています。

この事業の大きな特徴は、既存の分野や流派を超えた若手伝統芸能家や舞台関係者による「プロジェクトチーム」を中心に企画立案している点で、約1年かけて

新作舞台を作り上げました。

この他に、公演の舞台制作を手伝っていただくサポートスタッフを募集し、プロジェクトチームのメンバーが講師をつとめる講座を受講してもらい、伝統芸能に関する知識を深めていただいたうえでサポート活動に携わっていただいております。また、伝統芸能を楽しむための基本的要素を初心者にもわかりやすく解説する「京都創生座伝統芸能ことはじめ」を第3回公演に先駆けて京都芸術センターにて開催しました。

さらには、関連企画として、伝統芸能を支える装束や楽器の展示・解説を行い、舞台を支えるこれらのわざに身近に触れていただけることができる取組も行いました。

伝統芸能は、お客さんの側にも観る力を求める芸術です。京都創生座のこれらの取組は、芸能者が鑑賞者に見せるという一方的な関係ではなく、鑑賞者が芸を深く理解し、積極的、主体的に応答するという、「座」という構造の形成をコンセプトとしています。

世界に誇る文化芸術都市・京都の明日への軌跡となるよう取り組んでまいりますので、今後とも皆様のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。



創生座サポートスタッフ向け講座より 撮影：鈴木大輔



京都創生座第3回「四神記」より 撮影：大島拓也

京都芸術センター

所在地 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2
TEL.075-213-1000

開館 平成12年4月1日

事業 若い世代の芸術家の制作活動の支援
芸術文化に関する情報の発信
芸術を通じた芸術家と市民との交流

管理運営 (財)京都市芸術文化協会(指定管理者)

まちの記憶を伝えていく 「まちかどアルバム」

財団法人京都市景観・まちづくりセンター

まちには教科書に載っていない歴史や思い出が詰まっています。「まちかどアルバム」事業は、地域で体験した出来事や身近な「まちの記憶」を集め、語り合い、展示をすることでそれらの記憶を共有する取組です。

この取組を開始した平成19年度、地元関係者、学芸員、まちづくりコンサルタント、行政関係者、景観・まちづくりセンターをメンバーとする「京都創生まちづくり企画会議」を立ち上げました。家に眠っている一枚の写真から地域交流を生み出せる—そんな一歩から始まり、東山区の六原学区、貞教学区、修道学区の地域の方々から約500枚に及ぶ写真や映像をお借りし、その中の約200枚を活用して、26枚のパネルを作成、東山五条・七条（おおむね東大路通から川端通、松原通から七条通の範囲）の店先や軒先に展示する「五条七条・まちかどアルバム」（平成20年3月22日から30日まで開催）を行いました。

期間中に、展示したパネルを見て歩くガイド付きの「思い出ツアー」を行い、写真を提供してくださった方とツアー参加者との交流や、新たな発見などもあり、地域資源の豊かさ、深さを感じることができました。まち歩きの後、景観・まちづくりセンターにおいて、この取組の成果を検証し、今後の展望を考える『京都創生「思い出まちづくり」フォーラム』を開催しました。「この取組を

通して普段は見えていなかった思い出というものが、何かの拍子に波紋となって広がっていくのが見えるようだ。」といった意見が出され、思い出が求心力となってコミュニケーションが生まれ、さらにはまちの未来のビジョンを描くことにも生かされるというまとめで締めくくりました。

平成20年度には、昨年度作成したパネルに加えて、地域の方からお借りした道具類などを一箇所に集め、「東山まちかどアルバム展」を開催しました（平成20年9月24日から10月8日、東山区総合庁舎展示ホールにて開催）。代々受け継がれてきた道具や大切に残されていた品物が再び地域の人々の目に触れ、過去であったものが現在にいきいきと輝き出しました。

また、平成21年3月11日から24日にかけては、市内各地で地域の皆さんが古写真等により作成されたパネルを景観・まちづくりセンターで展示するパネル展を開催しました。

地域のコミュニケーションを充実し、地域への愛着を生み、まちとひとのかかわりが豊かに持続する地域の活力をつくるきっかけになる、「まちかどアルバム」の取組は徐々に市内各地で展開されています。これからもまちの記憶を伝えるお手伝いを続けていきたいと思いを。



完成したパネルに見入る地域の方々



「思い出ツアー」（平成19年度）でガイドの話を聞く参加者の方

財団法人京都市景観・まちづくりセンター

所在地 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町 83-1
「ひと・まち交流館 京都」 地下1F
TEL.075-354-8701

設立 平成9年10月1日

事業 町家相談
景観・まちづくりに関する活動支援
各種セミナー・シンポジウムの開催

NPO 法人京都観光文化を 考える会 “都草”

「都草」とは

平成16年に始まった京都・観光文化検定試験（通称：京都検定）で認定された人々をはじめ、京都の歴史・観光・文化を学ぼうとする人々が集まり、平成19年に発足した団体です。

京都は千年以上も都として政治、文化の中心であって、歴史を秘めた多くの社寺・史跡が存在し、加えて伝統の文化、美術、工芸、祭、行事などが今尚息づいています。このような京都の観光・文化の振興と地域貢献を目的として活発な事業を展開しています。そして、発足後、わずか1年余という短期間でありながら、著しい成果をあげています。

活動内容

基本的な活動としては、社寺境内・史跡の「美化活動」、京都の社寺・史跡を探訪する「歴史探訪会」、個々の会員が研究の成果を発表する場である「研究発表会」、京都に関するテーマの「講演会」などを定期的に行っています。

最近では、京都検定上級者が多いことから、二条城や神社、寺院などからボランティアガイドの依頼が少なくありません。また、京都へ修学旅行に来る学校からは事前勉強会に講師として招かれることもあります。

昨年12月に開催された「京都御苑歴史散策の集い」では、御苑内の史跡20ヶ所でガイド活動を行いました。参加者に喜んでいただいた、その裏では、丹念に集められた基礎資料、リハーサルを繰り返し、何度も推敲された口頭説明文など、会員の京都に対する知識と直向な研究心がありました。



活動風景

“ともに京都を学び・語り・遊ぶ”
をモットーに！

坂本理事長は、「定年等で仕事から離れたことにより、社会との関わり方が全く変わってしまいました。新たな自分の生き方を探す、そんな中で、京都にかかわることを選択された方が都草に集いました。つまり、都草は自分たちの“生きる場”なのです。」と。

しかしながら、その活動は実に自由。会員としての義務や押し付けはありません。会員は、すでに会社を退職した方だけでなく、会社勤めの方、主婦の方などそれぞれ立場も環境も異なります。だから、個々の会員の事情に合わせて、自由に活動ができるように“ともに京都を学び・語り・遊ぶ”をモットーに、自分たちが楽しみ、社会にも貢献できる、そういう活動を目指しています。

今後の展開として、坂本理事長は、「着地型の観光が注目されているなかで、個々のニーズにあった、都草メンバーならではの、きめの細かい案内、オーダーメイドの観光案内をやってみたい。」と抱負。「私達はガイドの専門家ではない。説明のテクニックもノウハウもない。」というものの、京都観光・文化のガイドとして都草へは、各界から大きな期待が寄せられています。



活動風景

NPO 法人京都観光文化を考える会・都草

理事長 坂本孝志

事務所 京都市上京区下立売通新町西入
京都府庁旧本館2F
TEL.075-451-8146

設立 平成19年8月23日

会員数 180名(平成20年12月現在)

京都市内学校への食育活動 野菜を育て、調理し、食の大切さを伝える

京都青果合同株式会社

京都市中央卸売市場で青果卸を営む京都青果合同株式会社では、京都市内の小学児童等の子供たちに、食の大切さを伝えるために、農業体験を通じた食育活動を行っています。

この事業は、全国の市町村に食育基本推進計画の作成を義務づけた「食育基本法」の成立（平成17年）に先駆けて、平成16年度からスタート、1年目は当社のマーケティング部が独自で行い、平成18年4月より京都市教育委員会と協力して進めています。



境谷小学校農業体験

活動内容

農業体験の進め方は、まず、ピーマン、ゴーヤ、ミニトマト、ブロッコリー、椎茸、スイカなど、季節に応じて、野菜や果物のなかからテーマを選び、そして、実習日程を公表します。京都市教育委員会等を通じて実習を希望する学校を募集するという形で進めています。

一例をあげると、西京区の境谷小学校では、ブロッコリーをテーマに実習を行いました。まず10月に、児童はブロッコリーについての基礎知識、出荷の流れ、ブロッコリーの作り方などを学び、その後、学校の敷地内にブロッコリーの苗を植えました。児童は、収穫の日まで大切に育てることを誓い、日々農作業に勤しんでくれました。そして、3月に、自分たちが育てたブロッコリーを収穫し、その場で塩茹でにして、マヨネーズをつけて食べました。このように、野菜・果物の

講義と、定植から収穫までの一貫作業を体験していただきます。あれほど嫌いだったはずのブロッコリーも、自分で育てたものは「おいしい！」って食べてくれました。



境谷小学校ブロッコリー調理実習

願い

食育活動開始から平成21年3月までの5年間で、実施小学校116、幼稚園8、高校4で、生徒・児童・園児の参加延べ人数は、実に14,099名に達しました。

日頃から、農業体験どころか、危ないからといって、子供に庖丁や火を扱わせることを避けている家庭が少なくありません。このようななかで、我々は、この食育活動を通じて、児童たちに食べ物大切さ、生産者のこと、農場から食卓にのぼるまでの過程のことなど、日々食べ物について考える習慣を身につけてほしいと願っています。

食の海援隊・陸援隊

当社では、消費者の方にも産地のことを考えていただくこと、魚介類・農作物の産地へのツアーを開催し、漁業・農業体験を通じて生産者の方々と交流を行う京都市中央卸売市場協会の「食の海援隊・陸援隊」事業に参画して活動を支援しています。

これからも様々な事業を通じて、皆様の食への理解を進められるよう努めてまいります。

京都青果合同株式会社

代表 内田 隆
所在地 京都市下京区朱雀分木町市有地
担当 マーケティング部
TEL.075-315-8223
業 種 青果卸

「京都創生」を推進しよう!!

《四美ポスター》



京都 幻想の美 清水寺：音羽の滝



京都 憧憬の美 清水寺：三重塔



京都 静寂の美 岩倉実相院：床みどり



京都 悠久の美 大徳寺塔頭龍源院：参道

「京都創生」を推進する第一歩として、4種類の京都の美を表現したポスターを作成いたしました。写真は、京都市出身の写真家の橋本健次氏のもので、いつもの見慣れた京都とは一味違ったものに仕上がりました。

皆様も、是非、このポスターを掲示し、京都創生の推進にご協力ください。

ポスターご希望の方は、(財)京都文化交流コンベンションビューロー (TEL.075-212-4110) までご一報下さい。

京都創生推進フォーラム広報誌「京都創生」

発行日 平成 21 年 3 月 31 日

発行 京都創生推進フォーラム

事務局：(財) 京都文化交流コンベンションビューロー
京都市中京区烏丸通夷川上ル 京都商工会議所ビル 5F
TEL.075-212-4110 FAX.075-212-4121